



抱かれたメイドたち

館



第1章 始まりは現在へ

5

第2章 ドールハウスの中へ

45

第3章 過去の記憶へ

125

第4章 未来へ

191

第1章 始まりは現在へ



それはどこか遠い森での出来事だった。

辺りには僕の声しか、耳に届かない。この時弱虫だった僕は、うつそうとした針葉樹林の間を、彷徨うことしかできなかつた。込み上げる涙を拭きながら。

歩き疲れ、空に陰りが出始めた、そんな時だった。

『もう泣かないで。迷子さん』

彼女が、霧の中から僕の目の前に現れたのは。

『怖かったの？　もう大丈夫だから、泣かないで。さあ、お顔を上げて。涙を拭いてあげる。……立てるかしら、ボクは男の子でしょ？』

彼女はわざわざ膝を折り、僕と同じ目線になってくれた。

『どこか痛い？　ケガしてるの？　見たところ、ケガはしていないみたいね。お名前、聞いていい？』

『……たかし…』

『そうか、たかし君っていうんだ。じゃあ、たかし君。どこから来たの？』

『あっち…』

僕は過去を指さした。

『それじゃあ、たかし君は、どこへ行こうとしたの？』

『こっち…』

今度は未来を指さした。

「おうち、帰ろうか」

「僕、ホントはおうちになんか帰りたくないんだ……」

「それじやあ、たかし君は何をしたかったの？」

彼女は神々しい微笑みを僕にくれた。

「あのね、僕はいつか、強い『俺』になりたんだ」

それは僕がずっと胸にしまっていた想いだつた。『俺』になれば、クラスのいじめっ子に、カツアゲされることもなく、宿題のノートを盗られることもない。女の子に無視されることもない。『僕』から、『俺』になる。それが子供の頃からの夢だつた。しかし僕の夢はいつも袋小路に迷い込む。針葉樹林の霧が立ち込める森に迷い込む。そんな夢の中で、僕を助けてくれるのは、いつも彼女だつた。

「たかし君、それじやあ、お姉さんが、道を教えてあげる。生きるということは、道に迷うことと同じなの。だから人間はよく、森の魔女に騙されて、お菓子のおうちの扉を開けてしまうの。おうちの中には甘いお菓子がいっぱいあつてね。お菓子ばかり食べちゃうと、食べた人も、いつかお菓子に侵されちゃうの。たかし君も大きくなれば、お姉さんの言つている意味、分かると思うわ。いつか：ね：」

子供の手にも細く感じられる彼女の白い指を、僕はただ離さないように強く握った。彼

女に連れられて、僕は森を抜けていく。

この森が、正確にどこだったのか。僕は憶えてはいない。でも誰かの夢の中かもしれないし、単に公園にある砂場のような箱庭だったのかもしれない。

そして彼女の名前を僕は最後まで知ることはできなかつた。彼女の優しい微笑みと、夏の風と、涙を拭いてくれたハンカチ。甘く、爽やかな髪の香り。写真のように停止した彼女の笑顔……。彼女は僕の夢にそれだけしか残してくれなかつた。

夢の森を抜ければ、それが、いつも僕が見ていた夢の結末であり、また『僕』が『俺』になつた始まりだつた。

相良崇：学校は卒業したもの、まだ『僕』のままだつた。

目を覚まして、最初に目に映つたのは天井だつた。一瞬自分の居場所を見失つてしまふ。しかし身を起こし、室内を見回してすぐに思い出した。

僕は現在、大富豪・葛城家の本邸であるこの屋敷に、住み込みの使用人として寝泊まりするようになつていていたのだつた。この不況下、それまで勤めていたガソリンスタンドのバイトをあつさりクビになり、途方に暮れながら就職情報誌をめくついていた時に見つけたのが、「住み込み作業員募集。年齢、性別、経験問わず」という求人だつた。『作業員』といふのは要するに、屋敷に住み込んで、あらゆる雑用一切をこなす下働きの使用人だつた。

三食まで保証され、個室までもらえることを聞いて、僕は即応募即採用ということになつた。広大な屋敷のため、若い男の使用人は多ければ多いほどいいらしかつた。

仕事も覚え、お屋敷の空気にも馴染んだと思つていたけど、まだ無意識のうちに緊張しているのだろうか、あんな夢を見てしまうなんて…。僕はまだ俺に変わっていない…。しかも金持ちの下働きの僕。でもそれが現実だつた。

目覚まし時計を見ると、すでに五時を回つていた。

「まずいっ、ギリギリだ！」

慌ててベッドから降り、身支度を整える。たとえ着替えといえども、仕事はすでに始まつていた。『葛城家の使用人たる者、身なりは常に清潔にすること』。古株の執事であり、使用人のまとめ役である柏木忠彦さんから、毎日聞かされている言葉が脳裏に浮かぶ。僕は五分で着替えを済まし、鏡で服装を確認すると部屋を飛び出した。

早朝の庭掃除が、使用人である僕の一日の始まりだ。初めの頃は眠くて面白くもない仕事だったが、毎日続けてみると、意外に心地よく、生まれ変わるような気持ちになれることに気がついた。

「あ、相良さん。おはようございます。今日も晴れてよかつたですね」

掃除用具を取り出していると、背後から明るい声をかけられた。声をかけてくれたのは湯浅七海という使用人の女の子だつた。まだ若く、僕と歳はそう変わらないが、この屋敷

で働いて長いらしい。彼女の両親も住み込みの使用人で、七海はこの葛城の屋敷で生まれたそうだ。

両親は葛城の当主・葛城勲氏の配慮で肉体労働から離れ、隣町で葛城が不動産運用する駐車場を管理しているらしかった。

彼女を羨ましいと思うのは、海外に滞在中の葛城沙英香お嬢様と同い年であり、幼馴染みで仲がいいということだった。この屋敷で、紗英香お嬢様と懇意であるということは、使用人の中でも特別に優遇されるということを意味している。しかし、そのことを鼻にかけないのは、七海の優しい性格によるところだろう。

「もうこここの生活には慣れました？ 初めての住み込みだったんでしょう？」

七海は微笑んで、僕に話しかけてくる。僕は掃除用具を小脇に抱え、歩きながら答えた。「慣れたつて答えたいとこだけど、今朝も寝坊してしまったよ。でも想像していたよりも、待遇が良くて安心しているよ。食事とかも、ここに来る前より充実しているくらいだしね」「以前は貧しい生活をなさってたんですか？」

「フリーーターの独り暮らしなんて、ホントに悲惨なんだ。給料もらえて健康になれて、このお屋敷で働けることを感謝しているよ」

「それはよかつた。何か困ったことがあつたら、いつでも言って下さいね…ぶつ…ふふ…」突然七海が口を隠しつつ笑いを堪えた。



「何？ どうしたの？」

「あ、い、いえ…ごめんなさい…あの…う、後ろ…」

「え？ 後ろ？」

言われて振り返ってみるが、特に変わった様子もない。いつも通りの朝の風景があるだけだった。

「そ、そうじゃなくて、あの…ぶつ…ふふふ…」

「笑つてないで、教えてよ」

「あははつ…頭です、頭…」

「頭？ ……うわっ、なんだこれっ？」

慌てて頭の後ろ、後頭部に手をやると、ものの見事に飛び起きた寝癖が指先に触れた。

「二、三回ほど手で撫で付けて直そうとするが、そのたびに情けなく跳ね返ってしまう。

「ふふつ…わ、笑っちゃダメなんんですけど…ふふ…ごめんなさい」

「…こんなアタマしていたら、柏木さんに怒られちゃうよ…」

「あはは、健康になつても、服装まではまだ気が回っていないようですね」

「面白い…」

注意されていることも守れていらない自分が情けなくなつた。

「お掃除が終わつたら、厨房に来てください。蒸しタオルを用意しておきますから。それ

で寝癖、直してください」

「あ、ありがとう。ごめん、仕事増やしちゃったね」

「いいえ、このくらい全然気にしてないです」

明るく笑う七海につられ、こつちも微笑み返してしまった。

「……さて、じゃあ僕も掃除を始めなきや」

「がんばつてくださいね」

お互に手を振って別れようとした時、七海がふと寂しげに顔を伏せたような気がした。確かにやうともう一度彼女を振り返るが、別に変わった様子はない。そして七海は厨房の勝手口へ消えていった。

葛城邸で働きだして最初の頃、七海には色々と世話になっていた。実際、七海がいなければ、僕はこの屋敷での生活に慣れるることは難しかったのかもしれない。いや、出来なかつたかもしれない。仕事の手順から使用人としての生活の心得やマナーまで、事細かに教えてくれたし、世話を焼いてくれるし、明るく親しみやすい性格なので、今ではすっかり友達感覚で話せてしまう。なによりいつも笑顔で優しい雰囲気の彼女は、僕を和ませてくれていた。

……一時間後には庭の掃除を終え、僕は七海が用意してくれた蒸しタオルで寝癖を直した後、続いて屋敷内の掃除に移った。

使用者ひとりひとりに一部屋、個室を用意できるだけあって、葛城邸は非常に広大であり、部屋数も多い。特に客間等は、高価というよりも巨大な装飾品が多く飾られたりしていて、男手が必要とされることも今まで何度もあった。たかが掃除と思っていても、金持ちの屋敷は貧乏な僕とは、生活そのものの次元が違うのだ。

僕が十三室目の客室を掃除しようと扉を開けると、すでに先客がいた。

「おはよう。紫苑^{しづゐ}」

「……おはようございます」

同じ使用者である和泉紫苑^{いづみ}が、花瓶に花を生けていた。

「花の世話かい？」

「世話は終わりました」

「そうなんだ？　ええと……それじゃあ……外はいい天気だね」

「昨日と同じだと思いますけど……」

「……そ、そうだね、今日もいい天気だね」

「今日も昨日と何ら変わりはないように思いますけど……」

「は……、はい、そうです。全くその通りです」

僕にはそう答えるしか選択の余地はなかつた。

——和泉紫苑。

つい最近、ある美術商の紹介でこの屋敷にやつてきたメイドだった。いつもそつなく仕事をこなし、真面目な人だとは思うけれど、いかんせん態度が素っ気ない。僕や他のメイドとも必要最低限の会話しかしないし、たとえ愛想笑いでも彼女の笑顔を見たことがない。一応親しみを込める意味で『紫苑』と名前を呼んでいるけれど、向こうは僕の名前を覚えてくれているのかどうか、怪しいところだ。正直言つて、つきあいたくない女の子だつた。

「さ、さあ……て、お掃除、お掃除つと……」

沈黙に耐え切れず、僕はことさら声を出して掃除にかかつた。紫苑は無表情で、僕のすることを見つめている。

「相良さん」

「あ、はい？ 僕は相良です。……て、今名前で呼ばれたような……」

名前を呼ばれて、少し驚いた。僕が誰なのかくらいは覚えてくれていてるらしい。

「この部屋の掃除なら、私がさつきやつておきました。他をお願いします」

「へ？ あ、あー、そう、そうなんだ、はあ……」

間抜けな答えを返しながら、室内を見回してみる。そう言われば、床はもちろん窓も家具も、きちんと掃除された後のことだつた。

「ホントだ、綺麗になつてる。ありがとう。助かつちやつたよ」

「いえ、別に。仕事ですか」